

中島公園にみる都心に隣接した氾濫原の公園化における社会文化的視点からの史的考察

Historical Research on How a Park Located on a Floodplain Adjacent in the Downtown has been Changed over Time from Sociocultural Perspective in the Nakajima Park in Sapporo

小林 昭裕*

Akihiro KOBAYASHI

Abstract: This study examined processes by contextual affection to a park from stakeholders with sociocultural perspective. Based on natural properties of Kamokamonakajim located on a floodplain, the history of Nakajima Park began with the holding of a modern event called a product show in 1887 in light with Sapporo residents and wise executive officials regarding the characteristics of the Kamokamonakajima to be early modernism and scenic beauty. After the park opened, the area around the pond was used in an early modern way, at the same time as sports festivals, art exhibitions and other modern usages of the facilities and open space were made to accompany the modernization of society. After an exhibition held in 1918, streetcars were established, athletic field facilities were introduced and 2nd attendance by the Princes saw the development of the southern district in terms of functioning as a place of gathering for sporting games and cultural events. This park conserved its early modern scenic beauty around the pond through the period of confusion during and following the war, and at the same time recovered a diversity of modern facilities for gathering of people, resulting in the establishment within the community of Nakajima Park being a park with multiple functions.

Keywords: *sociocultural, history, location, park, Nakajima, Sapporo*

キーワード：社会文化，歴史，立地，公園，中島，札幌

1. 緒言

公園を社会文化的視点から読み解く視座として，“地表面に刻み込まれた痕跡から人間活動のあり様や自然環境との関係を読み解くことに重点を置く見方と，深層にある意味，とりわけ人々が生きていく中で相互に関わり，自然との関係を積み重ねることによって構築された意味の探究を目指す見方”¹⁾が参考になる。

公園への時代的要請に対応し，何を保全しどの部分を改造してよいのかという問いに答えるには，詳細な公園史，施設史など公園の生活史的研究がなされた上で判断が導かれると，進士²⁾は述べている。将来に何を引き継いで，どのように発展させていくかといった判断の際に，公園政策に関わる行政，地域社会や市民等の様々な利害関係者と当該公園との関係性を自然立地的特性や社会文化的視点から把握することは，都市開発上の都合や近視眼的要求に無原則に左右されることなく，公園の対応指針を検討する上で有意義な知見につながると期待される。たとえば，公園のオリジナリティやアイデンティティの確認，あるいは，公園の立地特性，機能性や空間的多様性の背景をなす時間的積層性の構造，公園に対する象徴性やイメージの生成過程の検討，将来像を描く主体・描かれた内容の正当性・検討過程の妥当性等の論議など，現在の公園をどのような形で将来に継承するのかという問題に直面した際に，考慮すべき課題への視座となりうる。

社会文化的視点を，進士³⁾による生活史的研究方法を参考に，社会的に共有された歴史的・文化的意味を，市民，地方自治体，中央政府などの関係者が公園に積み重ねた履歴から読み解くと位置づけた札幌大通の事例研究では⁴⁾，社会制度の変化，市民運動の働きかけ，外来文化の影響，行政側の公園に対する評価の変化，近世から近代への価値観の移行等との関連性が示唆された。

本研究では，札幌大通の研究事例を踏まえ，若生⁵⁾が動物園の発展過程で提示した概念を参照し，ある時代の公園の存在・形態が，時代の社会文化的背景から影響をうけ，公園利用を介して公園観が形成され，さらに公園観が将来の公園の存在・形態に影響を及

ぼすという観点を織り込み，札幌都心を代表する中島公園を事例として，豊平川扇状地に立地した当該公園の自然立地的特性を考慮し，氾濫原の公園化の変遷過程を社会文化的視点から論じた。なお，対象期間を，都市公園法成立後と以前では法制度を含めて利害関係者と公園との関係が大きく変化することから，本研究では，都市公園法成立以前(1958)に限定して検討した。

2. 調査方法

(1) 対象事例

中島公園(210,416m²の総合公園)は，大通公園と同じ札幌都心にありながら，誕生の経緯をはじめ，異なる履歴をもつ。実際，「明治20年の物産陳列場の設置と，物産共進会の開催に始まり，(中略)その後の開道50年記念博覧会の開催によって，全国に存在価値を認めさせ，その後博覧会，品評会，展開会の全盛時代をつくりあげた。しかし，戦争末期に様相が変わり，戦後再び耳目を集め，昭和33年の博覧会をもって，公園機能は一変した。(中略)」と山崎⁶⁾が記載したように，中島公園は幾度の変貌を経て，札幌都心を代表する公園として市民に親しまれている。

(2) 調査方法

欧米近代化思想・技術の導入により，荒蕪地の開拓から始まるという，府県とは異なる社会的歴史性を考慮し，目的に即して既存資料や文献を整理する枠組みとして，中島公園と市民や管轄行政との関係性に焦点を当て，広域行政や中央政府の動向，近世から近代への移行期という時代背景を織り込み，文献資料の不足している点を推論で全体像を論考することとした。なお，本論では社会文化的視点に基づく史料の解釈を行っていることから，解釈に議論の余地があることを付記する。明治期の北海道の公園成立事情については小寺⁷⁾や俵⁸⁾，中島公園については山崎^{9,10)}の先行研究の成果等を批判的に検証しながら，史実を整理した。本論上の重要な史実に関しては，公刊，行政史資料，新聞記事，関連文献調査を行った。中島公園の変遷について，制度上の位置づけの

*専修大学経済学部

転換時に着目し、開拓使設置から中島遊園地の開設までの期間(1869~1886)、中島遊園地から中島公園への転換までの期間(1887~1910)、中島公園成立から都市公園法制定まで(1911~1958)に区分して整理した。

3. 結果

(1) 中島遊園地の開設に至る経緯(1869~1886)

1) 鴨々中島の自然立地特性と地域社会の対応

札幌本府の南に隣接し、豊平川本流と分流の一つである鴨々川に挟まれた地域を、当時、鴨々中島と称した。本府は豊平扇状地に立地し、頻繁に水害に襲われた。同時に、本府設立には建設用材として木材を必要とし、豊平川からの木材流送に頼っていた。開拓使札幌本庁の判官(赴任期間1871年1月~1873年1月)である岩村通俊は、平時の木材輸送と高水位時の洪水調整とを円滑に行うため、豊平川と鴨々川の分岐点に水門を設けると同時に、木材の貯木場として、鈴木元右衛門に命じ堀を完成(1871)させた。この堀(当時、元右衛門堀と呼称)が開削された場所には、扇状地の形成過程で生じた小さな池が二つあり、その池を活用(図1)¹¹⁾したと推定され、現在の芭蕉池の起源にあたる。

開拓使設置後、最初の豊平川の氾濫被害は1871年、鴨々川の取り入れ口付近と南6条周辺から浸水、1872年に鴨々川取り入れ口の復旧工事がなされた¹²⁾。しかし、1873年、1876年、1877年、1879年と水害が連続し、浸水箇所もいずれも鴨々川水門あるいは南6条あたりであり¹³⁾、その度に鴨々中島は氾濫原と化した。1880年、札幌と小樽手宮間の鉄道開通によって、本府への物資運搬路としての創成川及び鴨々川の機能が部分的に代替され、防火用水、雑用水、雨水の排水路としての役割を担うこととなった¹⁴⁾。そして、豊平川及び水門制御は洪水調整機能が優先され、翌1881年、南1条から南8条までの左岸に堤防が初めて築堤された¹⁵⁾。1982年4月、開府以来最大の洪水に見舞われ、開拓使は中央政府に指示を仰ぎ、堤防の補強や新たに築堤され1884年9月に完成した¹⁶⁾。これによって、頻繁に水害を受ける鴨々中島は被害軽減の目処が立った。

1882年10月、鴨々中島を東に隣接する山鼻村では、戸長名で、鴨々中島を小学校経営支援の学田とする旨の願を札幌県令に提出した¹⁷⁾。札幌区史の記述によれば「中島公園の開設(中略)明治17年に至り山鼻村は該地其村内に属するを以て、山鼻公立小学校学田地として其全部の払下を出願したり、因って時の区長山崎清躬此報を得るや、同年五月直に総代会を招集して議する所あり、6月26日札幌県令に対し、該地を挙げて札幌公園予定地に編入を請ふの意見を上申し、7月2日其公認を得、翌18年9月に至り公園予定地を取消し、更に遊園予定地と心得へき名義変更の示達を受けたり、札幌区民の中島公園設置の希望を懐くや其敢て1日

にあらざるを知るべし(中略)¹⁸⁾。堤防が完成を見た1884年の翌年、1885年に中島公園予定地が中島遊園地予定地に変更され区民の要望が実現の運びとなった。

2) 鴨々中島の自然立地特性に対する地域関係者の評価

岩村判官は「計画ハ北ハ偕楽園、南ハ中島、西ハ円山、東ハ苗穂(御料局付属果樹園ノ辺)ニ公園ヲ設ケ其間ヲ市街トナス(中略)¹⁹⁾とされ、「岩村は市街の四方に公園を設ける計画を立て、西は円山、南は中島、東は苗穂近辺を予定し、北は今の北6条西6.7丁目にあたる水木幽邃の地、人々の遊覧の場所を設け、四民偕に楽しむという趣旨で偕楽園と名付けた²⁰⁾と記された。

また、開拓使長官黒田清隆(在任期間1874~1882)は、東京出張所から鴨々中島の処遇に関し「河岸に沿ふて植桑に適するを認め、該地域内に桑園を開くべき旨東京より命令し来れり、然るに当時札幌在任の判官調所廣丈鈴木大亮は該地域を以て、将来札幌の繁栄を増すべき一要地となるべきにより、之れに桑園を開くを非なりとし(中略)該地域が本区に付与され、今日遊園地となりて区民の娯楽に供されつつあるは、全く調所鈴木両判官の賜と謂わざるべからず・・」²¹⁾と、黒田長官からの農地化提案に対し、現地の判官が将来の市街の発展を見越し留保するよう求めたことが、後に地域社会から高く評価された。

「中島公園の開設(中略)其地勢高燥にして且豊平川に沿ひ、インカルシベ山(藻岩山を指す)を望み自ら天然の風致を備ふ因って明治15、16年の交総代人及有志者等々公園予定の意見を当局に陳して該地の売買貸与を停止せしめたりしに」²²⁾と記述されたように、鴨々中島は、鴨々川の流れ、藻岩山を遠望できる景勝の条件を有し、同時に、本府市街に近接することから、立地及び風致的特性が評価されており、それ故に札幌区民も鴨々中島を公園とすべく要望していた。安野²³⁾が、近世以来の価値評価として、近郊の名所と呼ばれる風光のよい場所であり市民の行楽地としてふさわしい場所と指摘したように、鴨々中島の風致的評価は、近世の価値評価の延長であったと考えられた。

一方、1879年、函館での公園整備にみられた住民協働の成果は²⁴⁾、公園開設における住民の役割を社会に周知することとなり、1882年に区民有志から公園予定の意見が表明された。したがって、鴨々中島の風致が維持されたのは、本府の発展を見通し、該地を留保した岩村、調所、鈴木、3人の開拓判官らの見識と同時に、区民からの要望が提出される程度に、鴨々中島の風致的評価に対する共通認識が形成されていたと同時に、公園要望の意思を表明する必要性が住民間に共有されていたと推察された。

一方、開拓使は1878年に大通で第1回農業博覧会、1880年に第2回農業博覧会、1881年に共同連合米菘共進会、1884年北海道物産共進会を開催したが、偕楽園は散策によくとも施設を設けて集会を催すだけの空地がないことから²⁵⁾、開拓使を受け継いだ札幌県(1882-1886)、北海道庁(以下、道庁)(1886-1947)は、共進会開催に常設の恒久施設の立地場所として²⁶⁾、大通以外の候補地として新たな開催場所の選定に苦慮していた。

(2) 中島遊園地から中島公園への転換(1887~1910)

1) 遊園地として開園した経緯に関する推論

「太政官布告第16号」が示達され、北海道内に函館公園があるにも拘わらず、なぜ、1885年、札幌県が公園予定地としての裁可を取り消して遊園予定地に変更したのか、中島公園の成立に関わる案件として、当時の社会情勢をもとに推論した。

函館公園の開設について、函館は公園設置の条約上の義務を負っていなかったが、依は²⁷⁾函館支庁では、「府県及各港等輻輳之地ニテハ人民優遊之為公園取設候儀ハ中外普通之儀ニテ人民愛護之主意ニ基キ候事」と、当時の行政官の考えを示したうえで、「当時の日本の公園には、古来の勝区など群集遊覧の場所を公園化し



図-1 明治初期の鴨々中島 (地名等の加筆、筆者) 【開拓使 札幌県時代の懷古図、札幌市中央図書館蔵】

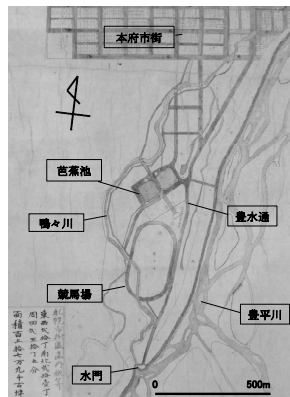


図-2 札幌市街之図 (地名等の加筆、筆者) 【明治23年 札幌市街之図【札幌市公文書館蔵】

た太政官制公園と、横浜などの開港場で居留外国人から要求された新設公園の二つの流れがあった²⁸⁾と指摘した。したがって、1874年の函館公園の開設は、1873年の太政官布達の趣旨と異なり、むしろ、居留民の要望から1870年に開園した山手公園（横浜）と同様に、国内外において港湾都市に公園は通常存在するという、新設公園に近い文脈として開拓史は認識していたと推察された。

北海道内では、花園公園（現在の小樽公園）が1881年に開拓使長官黒田によって共同遊園地に指定され、1893年に道庁より「後志国小樽郡花園町奥ニ於テ原野地凡参拾七町六反七欵老歩共同遊園地トシテ可払下候」の許可を得た。なお「小樽遊園地」を「小樽公園地」と改称すべく小樽側よりの請願があったが、これに対し道庁側の承認が得られるまでには相当の時間が必要であった²⁹⁾。1888年に東京市区改正条例公布、1896年に道庁が「殖民地撰定及区画施設規定」で「公園遊園敷地」を予定地として明記し、1889年に旭川で区画測設の際に市街地に隣接し「遊園地」が計画された後³⁰⁾、1900年に共同遊園地は花園公園と改称された。対象事例は後(1954)に「(中略)、偕楽園の設置以来札幌の北部に収集されていた諸遊園的設備はことごとくこの地に移転した。」³¹⁾とあり、遊園的設備を備えた場として認識されていた。

全国に視点を移すと、当時、私設の遊園地を除き、公的な空間で「遊園地」という言葉は、1875年に神戸に「内外人遊園地」に初見され、西洋式運動公園とされる³²⁾。また、「遊園」という語は、1871年アメリカの文物を視察した左院中議官、中川の上申書に「パルク」「ガルテン」の訳語として遊園が用いられた³³⁾。1885年、東京市区改正審査会の復申において公園予定地に大遊園、小遊園という語が使用された³⁴⁾。

したがって、1885年の時点では、太政官布告に該当しないものの、欧米人の概念・実態上の公園を具現化する場合に“公園”の名称を用いる一方、鴨々中島に対し、札幌県は、「古来ノ勝区名人ノ旧跡」に該当せず、新設公園にも該当しないと判断し、その上で、遊園的諸施設が集積し「群集遊観ノ場所」に相当することから、公園に近い概念を持つ遊園の言葉を採用し、“遊園地”の名称を用いたと推察された。

2) 賃地料による遊園地の造成および運営とその効果

札幌区史によれば³⁵⁾、「札幌区会総代人会は中島遊園地開園の設計を立て、道庁と交渉の結果、有志の寄付及共有金の繰替えを以て(追て賃地料を以て返還の見込)著手の手順を定め同(1886)年10月該土地処分監督の認可を受け、続て其年12月該地164,618坪を札幌区に編入替えられたり、因つて翌20(1887)年融雪の候を待ち、先つ其道路開墾に著手せしに(中略)金五千元を札幌区に交付し鴨鴨以北の土木全部の事業を委託せり、因つて有志の寄付を停め該交付金を以つて直ちに工事を起こし(中略)」とされ、

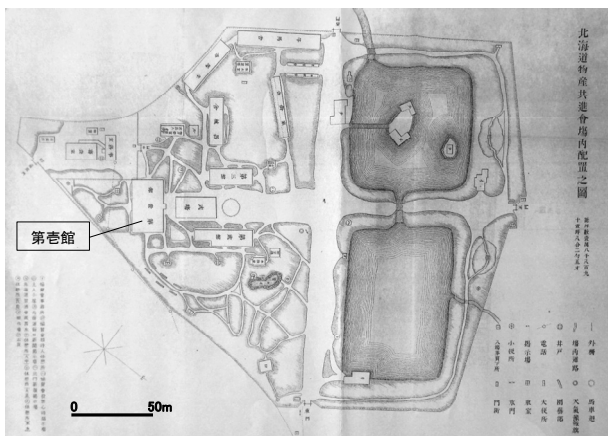


図-3 北海道物産共進博覧会場内配置之図 (縮尺等の加筆、筆者)
【北海道物産共進博覧会事務報告 完 付図、札幌市公文書館蔵】

当初、札幌区は賃地料を造成資金に予定していた。さらに遊園地の管理について、「該遊園地は(中略)賃地規則を定め、園内に於ては、和洋料理店、温泉、茶湯水店、碁会所、玉突き、室内射的、大弓、新聞閲覧所、寄席興行其他公衆の遊戯に供すべき諸業を営む者に貸与し、(中略)、該遊園地設計は木圍堀を改修したる園池を中心としたる者なるが東京庵、大中、大正等の料理店其池中または池に沿ひて営業を開始し、池に端艇を浮へ桜梅其他の植樹を為し又22年に岡田佐助面積3町歩を借受けて岡田花園を作り、各種の花草樹木を植え、池を鑿ちて金魚鯉を放ち、茶亭を設けて遊覧に便せり」³⁶⁾。

当時の明治政府は、「(中略)公園地で徴収された借地料が公園の管理のために用いられたことである。この管理方法が江戸時代のそれに連なるものであり、それ故に欧米のような公園を望んでいた政府は抵抗を見せた。」³⁷⁾とされた。札幌区が、中島遊園地の土地の一部を民間事業者に貸し付け、借地料を遊園地の管理に用いたのは、明治政府に沿った近世的手法の延長であると考えられた。また、1897年に偕楽園が対馬嘉三郎(札幌区長1900-1902)に払い下げられた際に「対馬は明治20年以来、管理が不十分な偕楽園を個人の出費によって「対面ヲ損傷セズシテ今日マダ維持シテキタ実績ガアル」³⁸⁾とあり、1887年の時点で偕楽園の管理費の捻出が困難であった情勢から、札幌区として遊園地の管理費の工面が念頭にあったのではないかと推察された。

利用動向を見ると、「西ノ宮、日吉亭、大正亭、臨池亭などの料亭やお休みどころが池の周囲に次々と建てられていきました。周囲にたくさんある寺社のお祭りや博覧会、競馬、相撲大会、花火大会など、明治のこの時期から札幌市民の憩いの空間になっていた。」³⁹⁾

岡田花園に関しては「当地の豪商岡田佐助氏の所有にして其面積三町歩余明治22年官地を貸下起工したるもの今は札幌区の公有地となりたれども氏は舊の如く之を借り受け年々拡張を加えつつあり園内には和漢洋の花弁非ざるはなく(中略)二個の花室にて種苗の培養冬季の準備を併せて挿木を行ひ池を鑿ちて金魚鯉等を放ち茶亭を構えて遊覧の客に便する等用意さらさるはなく百花爛漫たるの候一たび此に遊へば恰も一樂園に入るの思ひあり」⁴⁰⁾。また、「岡田花園は造園も手がけており、ここで技術を磨いた職人の中には、現在も手広く造園を営んでいる横山造園や小林集楽園の創業者がいました。中島遊園地周辺には西村花香園や南香園などの園芸店もたくさんあり、いわば園芸や造園の中心地であった。」⁴¹⁾

借り受けた民間企業が料亭や花園など利用者へ便宜を図ることのできた経済的利益を公園運営に還元した仕組みは、結果的に、土地を借りた民間事業者からの利用者への便宜の提供によって、市民の憩いの場としての魅力を高めたほか、公園周辺に造園・園芸技術の人事育成など拠点創成などの波及効果をもたらした。

3) 北海道物産共進会開催とその後の遊園地の利用

1886年に道庁(初代長官岩村通俊)が設置され、「遊園地造成は鴨々川の洪水防止対策、樹木の伐採、鈴木元右衛門堀の修理に加え、北海道物産陳列場の建設が含まれ、(中略)」⁴²⁾、1887年、中島遊園地開園と同時に北海道物産共進会が開催された(図-2)。

物産陳列場の建築に合わせ、道庁は「道路架橋修繕費に充て、工費として金五千元を札幌区に交付し鴨鴨以北の土木全部の事業を委託せり、(中略)」⁴³⁾とされる。「木材の貯木場であった鈴木元右衛門堀は四角形の2つに分かれた池であったので、浚渫して土で盛土、2つの池の間に橋を架け、南北に通り抜ける道路をつくり、中島橋方面から利用者を正面の北海道物産陳列場に導き、さらに南方の競馬場に向かう園路が遊園地の正門入りのコースとして登場した。また、鴨鴨川沿いに歩ける道路を整備することで薄野から山鼻へ抜ける近道となる。創成川の発端から西1丁目を南進す

る豊水通りが中島公園の幹線道路として完成した⁴⁴⁾。

「北海道物産共済会場内配置之図」⁴⁵⁾をみると(図-3)、方形の元右衛門堀の南側に正対して第老館、第老館から真っ直ぐに元右衛門堀を横断するように池を一部埋め立て正面園路、そして、池の北側に正門が配置されている。中央の軸線の両側に第式館、第三館が配置、池の小島には橋が架けられ大中亭の休憩所、池畔には大正亭の休憩所、池の北に築山が設けられた。共済会終了後も、これらの建物を利用し、1890年及び1892年の北海道物産共済会、1904年の北海道畜産共済会、1906年の北海道物産共済会(第老館の前に新たに北海道物産陳列場が建設)、1908年の第2回北海道馬匹共済会、第3回北海道畜産共済会、第1回蔬菜果実品評会など多くの物産展示会等が開催された。

また、共済会場の整備にあわせて競馬場が設営された。競馬はこれまで、1879年に屯田兵招魂祭が借楽園で行なわれて以来、例祭の一環として借楽園の競馬場で行われていた。しかし、手狭なことから、物産陳列場の裏手に競馬場が設計され、それは550間(約1000m)の馬場であった⁴⁶⁾。

北海道物産共済会后、園内の広場を生かし各種の集会が催された。中でも運動会について、1878年に札幌農学校でわが国最初の遊戯会(後の運動会)が北1条通で開催されて以来、毎年同時期に開催され、当時の札幌区の年中行事となり、官庁をはじめ多くの市民が参集した⁴⁷⁾。小学校の運動会は札幌農学校の遊戯会を模範として行われ、1887年に北5条西8丁目の道有地広場で連合運動会を開催してから本格化した⁴⁸⁾。翌1888年、大通の練兵場(西10-12丁目)で学校連合運動会開催され、同年、中島遊園地で酒造業者が店員慰労のための運動会開催が嚆矢となり、1891年に近隣の創成小学校の運動会利用を皮切りに、札幌女子小学校、東小学校、豊水小学校の運動会の開催会場として断続的に利用された⁴⁹⁾。1903年から区内の企業の大半が参加し大規模な運動会が始まった。運動会以外では、1889年の札幌消防組合消防演習実施、1895年の日清戦争凱旋祝賀会等の行事利用が行われた。

展覧会等では、1899年、中島公園の北に隣接した場所(現在の札幌パークホテル)に幌南学校が開設し、1906年に、幌南学校を会場を借りて絵画展の魁となる北斗画会第1回展覧会、1907年に北海道物産陳列場を借りて、札幌家庭園芸会の主催で、菊花展覧会(後の菊まつり)が開催されるなど、文化・芸術活動の拠点としての活動が萌芽した。

4) 長岡安平による公園設計とその影響

1888年に東京市改正条例公布、1896年に道庁が「殖民地撰定及区画施設規定」で「公園遊園敷地」を予定地として明記、1903年に日比谷公園が開園するという公園の近代思想が制度化・実現化していく時代の下、1903年、中島遊園地の整備について札幌区

会において数名の区会議員から、「都市ニ公園ヲ要スルハ論ヲ俟タズ」との理由で予算の臨時部の公園費中の調査費を計上する建議が区会で賛成を得て、1907年に札幌区が長岡安平と助手田中真次郎に設計を依頼した⁵⁰⁾。長岡安平は鴨々中島の風致を織り込んだ和洋折衷的な「池泉回遊式」の公園として「中島公園設計図」(図-4)⁵¹⁾、「中島公園設計書」⁵²⁾を1907年に札幌区長に提出した。

中島公園の設計方針として「・・本区ノ南端ニシテ地位高燥面積広潤喬木老樹々々繁茂シ東方ハ豊平川ノ本流ニ沿ヒ其分岐鴨川ノ清流ハ園内ヲ還流シ西方ニ藻岩山ノ秀峰其他限りナキ遠山雲表ニ聳ヘ呼稱ノ間ニアリ空気清爽閑雅幽邃ノ地境ニシテ頗ル風光ニ富メリ況ヤ斯ル景勝ノ地市街ニ接近シアルハ全国罕ニ見ル所ニシテ少シノ人工ヲ加エンカ公衆来テ楽マント欲スルモノ陸続種ヲ接シ当初ノ目的ヲ達スルヤ明ナリ故ニ主トシテ天然ノ景致ヲ利用シ猥リニ人工ヲ施サザルノ方針ヲ採レリ之ガ設計ヲ判明ナラシメンガ為メ全境ヲ三区ニ区画シ」⁵³⁾と記述し、鴨々川の清流と藻岩山や連なる山々への眺望の素晴らしい景勝地が市街地の近くにあり、自然の風致を活かすことを設計の基本方針としたことが読み取れる。そして、全体を3つの区域に分けて設計し、「第一区ハ主トシテ自然ノ美景ヲ利用シ在来ノ池ヲ取込メ遊船場トナシ舊馬場ヲ改良シ多数人ノ集合ニ適スベキ大運動場ヲ設置シ桜樹ヲ植栽シ其周囲ニ大小ノ曲線道路ヲ開キ豊平川ト鴨川ノ分岐点ニ丘ヲ築キ以テ園ノ内外ノ眺望ニ供シ岡田花園ニ大改良ヲ加ヘ逍遙者ノ娯楽ニ便ナラシメ 第二区ハ豊平川堤防敷地ヲ利用シ自然的動物園ヲ設置シ鹿其ノ他ノ動物ヲ放養シ中央ニ湧出セル清水ノ付近ニ大池ヲ新設シ水草ヲ点缀シ魚鳥ヲ放養シ老人婦女子ノ娯楽ニ供シ又北部ノ一区域ヲ公会堂建設予定地ニ選定シ 第三区ハ中央ノ地ニ池ヲ新設シ大梅林ヲ設ケ大小ノ曲線歩道ヲ開キ紅白ノ梅樹ヲ植栽シ林下ニ花弁秋草等ヲ散植シ四時ノ観覧ニ供シ馬車道ノ西隅ニ約四千坪ノ遊泳場ヲ設ケ周囲ニ常緑木ヲ密植シ遊泳池ヲ見透サザルニ務メ(中略)」⁵⁴⁾とされ、第一区について、自然の風致を活かすために池を拡張、多人数の集会利用を可能にする大運動場の整備、散策利用のための園路と眺望のための丘の造成、岡田花園の改良等、第二区について、動物園の設置、老人や婦女子の娯楽に供する池の新設や修景、池の南側の既存施設を生かした公会堂建設等、そして第三区について、池の新設と梅林の造成、四季を通じた草花の鑑賞、散策路や遊泳池の設置等が示された。

「中島公園設計書」および「中島公園設計図」に基づき、「1908年田中氏を招聘し実測調査を行い、予算調整を行った(中略)1909年から一部事業が着手された」⁵⁵⁾、「1910年に第1期工事が完成し、茶亭を移し、池を掘り、池畔に植栽するなど公園の主要な部分を整え」⁵⁶⁾、同年、中島公園に改称された。池を区分していた中央道路の撤去、池の浚渫で出た土砂で築山の造成、植栽がなされたことで、風致特性に配慮した長岡の設計が第一区の北部地域で部分的に実現された。

(3) 開道50年記念北海道博覧会開催以後(1911~1958)

1) 開道50年記念北海道博覧会及び跡地利用がもたらした変化
道庁は、従来の北海道物産共済会を改革し、全国的な協力を得て、東京等の博覧会を参考に、大規模な博覧会を計画した。1918年の開道50年記念北海道博覧会会場は中島公園の池及びその周辺、既設の北海道物産陳列場、それに札幌招魂社前の広場までを加えたものであった(図-5)⁵⁷⁾。敷地に関して「(中略)風光明媚の地として名声あり且つ同所に建設しある北海道物産陳列場の建物を利用し得るの便あり又交通機関としては従来馬鉄の便ありしも博覧会開会までには電車開通を予定を以て(中略)」⁵⁸⁾、会場の配置に関して「会場内諸建築物の配置は土地の状況及樹木の関係等に依り深甚の注意を要するのみならず陳列館は観覧の順序並便否等に就いても大に考究を要するを以て(中略)場内の樹木は建

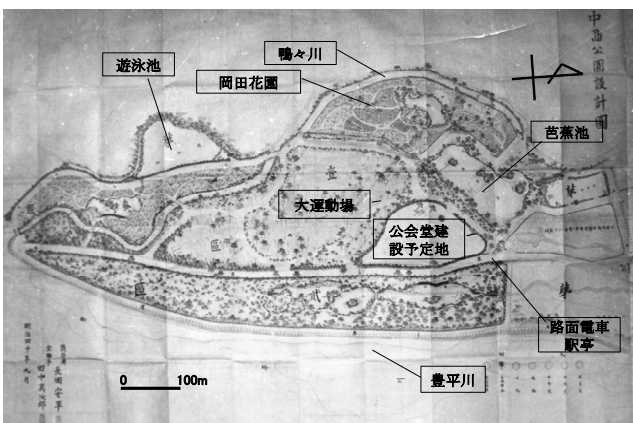


図-4 長岡安平による中島公園設計図(地名等の加筆、筆者)
【中島公園設計図、札幌市公文書館蔵】

築物に支障あるものの外は可成之を存置し以て風致を損せざる様注意の上正門の位置は勿論各館の配置をなしたり(中略)⁵⁹⁾。施設及び会場の配置にあたって利用者の利便性のみならず、風致的特性を損なわないよう留意していた。また、配置構成について、「既設の旧物産陳列場は北西側、池・小島に正対しおのずから1軸を形成していた。この軸はそのまま副軸として生かされ、旧物産陳列場を農業本館に改装、軸上に奏楽堂を置き、池小島には橋を架け迎賓館を新設した(中略)副軸に平行して主軸が設定された。主軸は奥に向かい中央の水族館と左右の林業および鉱業館、参考館が馬蹄形に配置され(中略)⁶⁰⁾、軸線に対して対称的に建物等が配列された。一方、池の形状は従来の方形から、汀線が曲線化し、池中にある島の位置が変更され、現在の中島公園の芭蕉池の原型が形作られた。また、池の北側(現在の札幌駅前通りに直結)に入口を設け(従前の池を横断する入口からの変更)、池畔を歩いて会場に入るコースが設定された。

開道50年記念北海道博覧会後の空間構造の変化として、1919年、公園中央を多人数の集会利用が可能な広場にして、その東側に野球場が設けられた。池の導水口を上げ、その土砂を運んで天文台の丘が造成された。さらに大正の末、流れ口付近を拡張し現在の池の形になった。「中島公園設計書」に記載された動物園や遊泳池について、位置や形態は異なるものの、1926年に国産振興博覧会開催の際に岡田花園に動物園と「子供の国」が設置され⁶¹⁾、1929年に製氷場跡地に中島プールが竣工した⁶²⁾。

開道50年記念北海道博覧会に際し利用者へのアクセスを改善するため、札幌駅から路面電車の敷設工事が行われ、8月に札幌停車場と中島公園間が開通した。12月に電車終点を西ノ宮支店(現在の札幌パークホテルの南裏手)の入り口側に延長したことで⁶³⁾、博覧会終了後、中島公園の主要な入り口が新たに加わった。路面電車開通後、市内だけでなく、遠隔地からも札幌駅で乗り継いで容易にアクセスが可能となった。さらに、大正天皇、昭和天皇、いずれも皇太子として、2代にわたる札幌行啓(1911年と1922年)の際に中島公園への御成りは、中島公園の社会的地位を高めたと推測され、実際に、競技大会(全道レベル)の競技会場のとしての地位を固めていく契機となった。

競技利用に関して、1921年に池を活用して第1回全道中等学校水泳競技大会が開催、1924年に第1回北海道少年野球大会開催、第1回全道中等学校氷上競技選手権大会が開催、1927年に第1回北海道ホッケー選手権大会、1930年に第1回全道ラグビー選手権大会開催、1934年に第1回全札幌アイスホッケー選手権大会、全日本氷上競技大会などが開催された⁶⁴⁾。なお、大正末から昭和初期にかけては、「体力は国力」とみる国家的理念のもと、公園に運動場の増設が行われた時期とされる⁶⁵⁾。

産業技術の普及、文化交流面に関して、博覧会後も恒久施設として残された旧教育拓殖衛生館が博物館類似施設として、旧農業館が集会場として活用され、1920年に全道農具共進会、1924年に北海道計量展覧会、第4回工業品評会が開催、1925年にアムボール美術展覧会、第1回北海道美術展覧会、第1回道展が開催、1926年に国産振興博覧会が開催、1927年に第1回フランス美術展覧会が開催、1930年に札幌商工品展覧会や国産品愛用巡回展覧会、1931年に国産振興北海道拓殖博覧会、第1回北海道美術連盟主催の美術展覧会が開催、1932年に第1回児童唱歌コンクール全道大会等が開催され、また、1928年にJOIK(現NHK札幌放送局)によるラジオ放送の演奏所が設置された⁶⁶⁾。

池以南にある施設や広場で、全道レベルでの競技大会(水泳、スケート、野球等)や共進会、展覧会、品評会が開催され、スポーツ競技だけでなく産業技術の普及、文化交流の場など、利用形態の近代化が進むとともに、多様な集会機能を有する場に変容した。

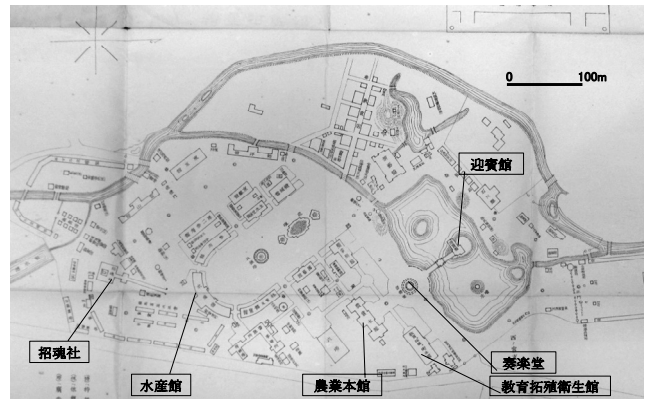


図-5 開道50年記念北海道博覧会会場案内図(縮尺等の加筆、筆者)【札幌市中央図書館蔵】

2) 戦時体制がもたらした変化及び戦争の混乱からの復活

1933年に公園西方の鴨々川を挟んだ園内南14条西5丁目に札幌招魂社社殿が公園の一環として造成され⁶⁷⁾、1938年に札幌冬季オリンピック大会開催中止が決定され、1939年に札幌招魂社が札幌護国神社と改称された。1940年に北部軍憲兵司令部設置に伴い旧農業館が接収され、札幌護国神社の神域が拡張され、大政翼賛道民大会および日独伊三国同盟大政翼賛会全道民大会が開催された。1941年に芭蕉池で1923年から毎年冬に開催していた氷上カーニバルが終焉、1943年にアツ島英霊の慰霊祭が行われ、継続的に実施されていた運動会が中断されたが、氷上競技大会、水泳大会は終戦まで継続された。園内には陣地兵営が築かれ、自給菜園に利用された⁶⁸⁾。このように、戦争や戦時に関連した施設の拡張や行事の開催、体位向上の場として機能が重視され、戦時色が強く現れた。

戦後、公園は米軍に接収されたほか、戦時中からの軍の使用と戦後の引揚者住宅などで園内が荒廃した。さらに、公園区域の一部であった豊水通りの東、堤防の間の細長い一帯の市有地が売却され、長岡の設計案にあった第二区(豊水通の以東)の案の実現は困難となった。1947年に進駐軍の接収が解除され、1949年に中島児童会館が開館した。1946年から早くも野球大会や庭球選手権大会が復活し、1949年に中島球場のスタンドが完成、1950年に北海道開発博覧会の開催、1954年に中島スポーツセンターが開館し、第9回国民体育大会のメイン会場として使用され、競技会場としての社会的地位を復活させた。そして1955年に中島公園の改造計画の大綱が決定、1957年に総合公園となり、豊平館が北1条西1丁目から移築、1958年に戦前に博覧会場として使用された場所で「北海道大博覧会」が開催され、博覧会場としての復活を果たした。

4. 考察

鴨々中島は、自然立地的に、本府市街の洪水対策上の重要な場所であると同時に、社会文化面で、近世名所風の風光明媚な景観特性を有しており、隣接する札幌本府と山鼻村の双方の発展上有用な場と評価されていた。1880年の鉄道開通による物流変化によって、豊平川及び鴨々川に対する洪水対策が優先され、水門及び築堤が進展したことで、鴨々中島の洪水被害の軽減のめどが立った。このことが、隣接する山鼻村からの学田使用願、対抗して札幌区からの公園予定地への願いが導出され、札幌区から札幌県に公園予定地としての請願が契機となり、共進会場の確保の観点から札幌県や道庁が好機と判断したことが、北海道物産共進会の開催と同時に中島遊園地の誕生に至ったと考えられる。

また、公園を求めた当時の札幌区民の有志や、鴨々中島の特性に配慮し農地化を留保した開拓使判官らの見識がなければ、鴨々

中島の風致的特性は喪失したであろう。また、太政官布達が示される以前に、岩村判官が本府の東西南北に公園配置予定を示し、南に想定した場が、札幌都心の緑地の骨格をなす中島公園の創出の発端となった点で、岩村の見識は高く評価される。

一方、太政官布達により設置された近世由来の公園と、居留外国人の要望に設置された西欧近代に由来する新設公園が両立した明治初期の時代背景のもと、1885年の時点では、太政官布達に該当しないものの、欧米人の概念・実態上の公園を具現化する場合に“公園”の名称を用いる一方、鳴々中島に対し、札幌県は、「古来ノ勝区名人ノ旧跡」に該当せず、新設公園にも該当しないと判断し、その上で、遊園の諸施設が集積し「群集遊観ノ場所」に相当することから、公園に近い概念を持つ遊園の言葉を採用し、“遊園地”の名称を用いたと推察された。今後、1926年に「子供の国」が岡田花園に開設した経緯を、近代遊園地の誕生経緯と合わせ、遊園地と公園との関係を整理する必要がある。

1887年、中島遊園地が開設され、賃地料による遊園地の管理において、近世以来の仕組みが導入されたほか、池畔での料理店や茶亭での遊覧利用など、近世的利用が芭蕉池や周辺で展開された。一方で、池の南側では、競馬場をはじめとした施設整備や、市民の間で運動会が普及し、小学校や地域企業の運動会場としての遊園地利用が定着、さらに、恒久的施設としての物産展示施設の活用として展覧会が開かれるなど、当初、想定していなかった近代的公園利用が展開され、近世から近代への過渡的社會を反映した変化が公園利用に反映されたとみられる。

1907年、和洋折衷的な公園設計を示した長岡安平による提案を受け、池周辺の整備後に1918年に整形的空間基軸をもった開道50年記念北海道博覧会が開催された。その際、開道50年記念北海道博覧会を立案した道庁は、施設及び会場の配置にあたって、風致的特性を損なわぬよう、長岡が設計書に示した近世的風致の保全に留意した。一方で、博覧会に合わせて路面電車が敷設され、遠方からの集客が可能となり、広場や競技（野球、氷上競技、水泳）施設の近代的整備が行われるとともに、2度の行幸を得たことを契機に、近代競技開催場所として社会的知名度を高めた。また、池およびその南側では、中央広場や博覧会後の残存する建物を中心に各種展覧会や品評会、共済会が開催され、スポーツ競技や産業技術の普及、文化交流の場など、利用形態の近代化とともに、多様な集会機能を有する場に変容した。結果的に、近世的佇まいを残す池周辺と、近代的な集会利用が展開する池以南の地域の併存という公園像が社会的に定着したとみられる。第二次大戦に伴う公園の荒廃後の戦後復興において、池の南側に野球場の整備や博覧会が開催されたことから、スポーツ競技や文化交流の場としての公園像が社会的記憶として継承されたものと推測される。

都市公園法成立以降、現在に至る社会と公園との相互関係の履歴の中で、本研究成果で示唆された事案がどのように反映されるかは変化したのかという点の探求や、探究された成果から本研究内容を照射し、その往還関係の究明から中島公園が持つ歴史的・文化的意味を、今後検討する必要があると考える。

謝辞：ご助言を頂いた依浩三氏、笠康三郎氏、ご協力を頂いた札幌市中央図書館、札幌市公文書館に対し厚く謝意を表す。なお、本論文は平成25年度 専修大学研究助成・個別研究「研究課題 自然体験からみる都市域の緑地の利用に関する研究」の研究成果の一部である。また、「科学研究費 挑戦的萌芽研究、H24年度～H26年度、自然体験からみる都市域の緑地の利用と変遷」の研究成果の一部である。

補注及び引用文献

1) 採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究

会編、採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究平成22年3月、<www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/pdf/hokoku.pdf>, 更新日不明, 2014.9.14 参照

- 2) 進士五十八 (1992): 歴史的公園の保全と再生: 造園雑誌 55(3), 270-275
- 3) 前掲2)
- 4) 小林昭裕(2014): 札幌市大通にみる広幅員街路の公園化における社会文化的視点からの史的考察: ランドスケープ研究 77(5), 633-638
- 5) 若生謙二 (1982): 近代日本における動物園の発展過程に関する研究: 造園雑誌 46(1), 1-12
- 6) 山崎長吉(1988): 中島公園百年一民衆の発掘した歴史の証明—: 株式会社北海タイムス社, 287pp, 6
- 7) 小寺駿吉(1962): 北海道における公園の発達とその社会的背景: 北海道大学演習林研究報告 212, 257-282
- 8) 依浩三(1988): 北海道における都市公園及び自然公園の成立事情とその公園史上の特異性: 造園雑誌 51(5), 61-66
- 9) 前掲6)
- 10) さっぽろ文庫編集室編(1988): さっぽろ文庫 84 中島公園: 北海道新聞社, 300pp
- 11) 不詳(明治初頃): 開拓使 札幌県時代の横古図(「札幌市史」社会文化編附込同名図(原図): 札幌市中央図書館蔵)
- 12) 札幌市教育委員会文化資料室編(1978): さっぽろ文庫 豊平川: 北海道新聞社, 310pp, 60
- 13) 宮坂省吾・佐々木啓輔・岡村 聡・関根達夫(2014): 日本地質学会北海道支部2014年サッポロ巡検 豊平川の洪水: 25pp<http://www.ricen.hokkaido-c.ed.pdf>, 2014.6.1更新, 2014.8.26参照
- 14) 前掲12), 187
- 15) 駒崎元雄(1978): 水との闘い さっぽろ文庫4 豊平川, 57-69, 北海道新聞
- 16) 札幌史学会 (1897): 札幌沿革史: 札幌史学会, 255pp, 99
- 17) 札幌市教育委員会編(1986): 新札幌市史 第七巻 史料編二: 札幌市, 1123pp, 864, 868, 871
- 18) 札幌区役所(1911): 札幌区史: 1028pp, 895-896
- 19) 河野常吉(年代不明): 岩村判官の逸事: 道立図書館所蔵, 河野常吉資料 17「札幌資料」
- 20) 高倉新一郎監修 井黒弥太郎, 片山敬次著(1967): 北海道のいしずえ四人 黒田・ケブロン・岩村・永山: みやま書房, 359pp, 190
- 21) 佐々木鉄之助編(1975): 明治42年 最近の札幌 札幌実業新報社 1909年発行の複製, みやま書房, 27pp, 101
- 22) 前掲18), 895
- 23) 安野彰 (2000): 明治・大正・昭和初期の日本における遊園地の概念と実態 近代都市における娯楽施設の成立に関する研究: 学位論文, 167pp, 30
- 24) 前掲4)
- 25) <http://sapporo-jouhoukan.jp/sapporo-siryoukan/bunkaisan/061.html>, 更新日不明, 2014.11.28参照
- 26) 河合健(2011): 明治から昭和初期の北海道における博物館とアイヌ民族—その設立経緯と資料収集をめぐって—: 人間文化創成科学論議, 14, 255-263
- 27) 依浩三 (1987): 函館公園の成立事情とその公園史上の特異性: 造園雑誌 51(2), 73-82
- 28) 前掲27)
- 29) 前掲7)
- 30) 北海道庁(1937): 新撰北海道史第4巻通説3: 1076pp
- 31) 札幌市建設部計画課 (1954): 「札幌都市計画概要」: 札幌市役所, 133pp, 78
- 32) 河合健(1990): 明治の「異化空間」・神戸東遊園地公園: 造園雑誌 53(5), 61-66
- 33) 丸山宏(1994): 近代日本公園史の研究: 思文閣出版, 380pp, 56
- 34) 白崎洋三郎(1995): 近代都市公園史の研究: 思文閣出版, 335pp, 186
- 35) 前掲18), 896
- 36) 前掲18), 897
- 37) 土肥真人(1993): 都市オープンスペースの居住人の動きを通してみた明治初期公園の位置づけ: 造園雑誌 56(5), 31-36
- 38) 依浩三 (1989): 北海道における公園と自然保護の発達に関する研究: 専修大学北海道短期大学紀要 22, 89-214, 103
- 39) 監修: (有)緑花計画 笠康三郎 (公財)札幌公園緑地協会: 「中島公園の歴史を振り返る」: <http://www.sapporo-park.or.jp/nakajima/?page_id=1222#>, 2010更新, 2014.8.16参照
- 40) 狩野信(1974): 明治32年札幌案内 廣目屋 発行 昭和49年復刻: みやま書房, 172pp, 66
- 41) 前掲39)
- 42) 前掲6), 55
- 43) 前掲18), 896
- 44) 前掲6), 81-82
- 45) 北海道庁(1892): 北海道物産共済会報告 完: 225pp 付図
- 46) 北海新聞社 (1887): 中島公園の位置及び共同競馬の様相: 北海新聞 1878年8月5日
- 47) 鈴木敏夫 (2003): 北海道における小学校運動会の起源: 北海道大学大学院教育研究科紀要 89, 31-52
- 48) 前掲6), 200
- 49) 前掲6), 200-201
- 50) 札幌市教育委員会編集(1994): 新札幌市史 第三巻通史三: 北海道新聞社, 918pp, 108
- 51) 長岡安平, 田中真次郎(1907): 「中島公園設計図」: 札幌公文書館蔵
- 52) 長岡安平(1907): 「中島公園設計書」: 札幌公文書館蔵
- 53) 前掲52)
- 54) 前掲52)
- 55) 前掲50), 109
- 56) 札幌市(2011): 札幌のまちとともに歩んだ 大通公園・中島公園・円山公園: 38pp
- 57) 北海道庁(1918): 開道50年記念北海道博覧会案内図: 札幌市中央図書館所蔵
- 58) 北海道庁編(1920): 開道50年記念北海道博覧会 事務報告: 北海道庁, 738pp, 139 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/957033>, 更新日不明, 2014.9.14参照
- 59) 前掲57), 147
- 60) 笹本明, 越野武, 角幸博 (1982): 開道50年記念北海道博覧会と明治大正期博覧会の建築: 日本建築学会北海道支部研究報告集 計画系55, 157-160
- 61) 前掲6), 112-113
- 62) 前掲6), 210
- 63) 前掲6), 62
- 64) 前掲6), 197-216
- 65) 前掲32), 138-149
- 66) 前掲6), 98-137
- 67) 前掲34), 81
- 68) 前掲34), 81